

鈴木有郷牧師説教

5/29/2011

神の道具 ミカ6:6-8

私が昔住んでた家にバイオリンがありました。居間にある本箱の上にちょこんと乗っていました。きれいな色をしており、弦もしっかりしていました。

私はこのバイオリンを目にする度に、何か悲しい思いがしたのを覚えています。ほこりをかぶって本箱の上に寝そべっているような楽器でしたが、バイオリンの制作者が一生懸命心を込めて造ったものに違いありません。私がふざけ半分に弾く真似をするためにあるものではなく、モーツァルトやチャイコフスキーやベートーヴェン等の名曲を奏でるために造られたものに違いありません。

しかし、そのバイオリンは、いつのまにか私の所有物となり、肝心な私はそれを弾くことができないのです。弾いても耳を塞ぎたくないような音しか出ないのです。

17世紀のイタリアはクレモナに住んでいたバイオリン制作者のアントニオ・ストラディヴァリは、その生涯で1000以上のバイオリンを制作したそうです。それらのほとんどは現在残っていません。残っているものはすべて100万ドルはする高価なものだそうです。

これらの行方不明の名器ストラディヴァリアスは一体どこにあるのでしょうか。イタリアの貴族の屋根裏に忘れられて横たわっているのでしょうか。ヨーロッパの大富豪に仕える召使いの道具箱の中にもほこりをかぶって隠れているのでしょうか。或は、そのような名器を奏でる技術など全くない人が、それ程の名器とは気づかずに、ふざけ半分に耳を塞ぐような音を出して、回りの笑いを誘っているのでしょうか。

私は二つの譬えを語りました。二つともバイオリンの譬えです。素晴らしい曲を奏でてもらいたいという制作者の思いから外れて、本箱の上や貴族の屋根裏に置いてきぼりにされている、或はキーキーと嫌な音を出しているバイオリンの譬えです。それを私たちの人生にあてはめてみましょう。

神は人間を最も心を注いで造られたと創世記は語ります。「神は人をその似姿に造られた。」私たちに、他の動物と違って、選択の自由が与えられています。絵画や文学や音楽を通して精神の内奥を描き、表現し、奏でる創造性が与えられています。宇宙の神秘に迫り、自然の法則を発見し、病気を癒す方法を考えだすことのできる能力が与えられています。人間とは何と素晴らしい存在なのでしょう。

しかし、この神が心を込めて造られた素晴らしい存在である人間も、実は大きな問題を抱えているのです。

私たち人間は、神に造られたことを忘れてしまうのです。神なしで生きることができると傲慢にも考えてしまうのです。神なしに生きるということは、錨のないボートのようなものだということを、忘却してしまうのです。

その意味で、私たちは、本箱の上に乗っているバイオリンに似ています。貴族の館の屋根裏に置き去られているストラディヴァリウスにそっくりです。

しかし、違うところもあります。これが大切な点です。結局のところ、私たちは人間であって、バイオリンではありません。バイオリンと違って、私たちは、本箱から降りることができます。貴族の館の屋根裏から太陽の照り輝く野原へと飛び出ることができます。私たちが奏でるべき曲を弾いてくれるバイオリンの名手に向かって歩き出すことができます。私たちは、私たちの創造者である神を仰ぎ見て生きることが赦されているのです。

神が私たちを使って奏でてくださる名曲、それは何でしょうか。私たちの生きる目的とは何でしょうか。

旧約の預言者ミカはその問いに明確に答えています。「人よ、何が善であり、主が何をあなたに求めておられるかは、あなたに告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(6:8)

正義とは自分の持てるものを他者と分かち合うことです。慈しみとは優しさの眼差しをもって他者と接することです。神と共に歩むとは、いかなる時も神を信頼し、祈るということです。

正義、慈しみ、信仰、これこそ私たちが奏でるべきメロディーに違いありません。

ですから、神の目的に適う者となるように、求め、祈り、努めようではありませんか。神は私たちの祈りに耳を傾け、応えてくださるに違いありません。